



発行責任者：歯学部長 宮崎 隆，編集責任者：広報委員長 佐藤裕二
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL 03-3784-8000
ホームページ：http://www.showa-u.ac.jp

3教授を送るにあたり

歯学部長 宮崎 隆



本年3月末日で、後藤延一教授(口腔微生物学講座)、芝燁彦教授(有床義歯学講座)、長谷川紘司教授(歯周病学講座)が本学の規程により定年退職されます。長谷川先生と芝先生は本歯学部創設時から赴任され、歯科病院の発展に貢献されました。後藤先生は少し遅れて故鷹森教授の後任として赴任され、学部長としてリーダーシップをとられました。各先生方は、教育に情熱を燃やされたばかりか、専門分野の研究で国内外で活躍され、本歯学部の発展に多大な貢献をされました。各先生方の熱のこもった最終講義は、我々後に残された職員、学生、そして卒業生の思い出に残るものでした。先生方の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。



後藤先生 2004.1.22



芝先生 2004.1.23



長谷川先生 2004.1.28

最終講義「言い残したこと」で言い残したこと 口腔微生物学教室 後藤延一



定年退職を控えて、1月22日に学生を対象とする最終講義「言い残したこと」を行いました。本日は、「歯学部便り」に教職員のみなさんへのメッセージを求められましたので、最終講義でも言い残したことを述べさせて頂きたいと思っております。

私たち昭和大学歯学部が直面している問題のうち、最も重要なものは教育に関する諸問題でしょう。私個人に関しては、歯学部出身でないこともあって、16年前に赴任して以来、歯学部での教育をいかに行うべきか模索を繰り返しました。徐々に悩みが深くなってきたときに、平成7年夏、富士吉田キャンパスで「第1回昭和大学医学教育者のためのワークショップ」が開催されたと聞き、矢も楯もたまたらずに、翌年の第2回にぜひ参加させて貰いたいと名乗り出て、幸い参加を許されました。このワークショップの体験は強烈で、「目から鱗が落ちた」と申しても決して過言ではありませんでした。このときの経験は、ともに参加された川和教授とともに、「歯科医学教育学会」のフォーラムで発表させていただき、歯学部でもワークショップを開催して、この経験を同僚の教員諸氏とも分かち合いたいという気持ちは高まったのですが、まだ、どのようにしたら開催できるか、雲をつかむような気持ちでした。

しかし、年々富士吉田ワークショップの受講者が増え、その意義を認める機運が学部内にも高まる中で、ついに平成10年、歯学部教育改革委員会(委員長・山田庄司教授)が「第1回昭和大学歯学教育者のためのワークショップ」を昭和大学病院入院棟17階会議室において開催しました。このときのタスクフォースは、山田、川和、久光、後藤のわずか4名で、今になって考えると、よくもこんな手薄な陣容で開催する気になったものだ、と思えます。正直に申しますと、当時私は、少々怖じ気づいており、初回で失敗して挫折するのではないかと心配をしておりました。しかし、この不十分な準備状況で始めたワークショップは、受講者に大きな影響を与え、昭和大学歯学部の教員に教育問題への関心を高めるきっかけとなる役割を演じました。すなわち、このワークショップを実施した、山田委員長の「蛮勇」こそ、その後の昭和大学歯学部の教育改革の動きを決定づけたのです。

その後、ワークショップは、会場を三島市東レ総合研修センターに移し、毎年8月に開催されるようになり、その歩みはほぼ定まってきました。それと平行して、「コア・カリキュラム」「共用試験」などの全国的な改革の流れに対応する体制も整い、新カリキュラムが発足し、学部をあげてPBL(問題基盤型学習)の導入にも取り組むことができました。

ここで、重要なことは、新カリキュラムもPBLも、第1回のワークショップ開催と同様に、決して十分

に準備をして着手したものではないということです。欠点を指摘することは容易です。だからといってこれを先送りするのではなく、失敗から学び、欠点を補いながら成長して行くべきだと考えます。

また、教育については、このようなシステムの改善も大事ですが、根本は教員の資質、とりわけ学生に対する愛情と責任感が重要です。資質向上には、ワークショップをはじめとするFD（ファカルティ・ディベロプメント）とともに、実際に教育活動を共同して行う経験が、相互により影響を及ぼすことを強調したいと思います。すなわち、議論より実践です。

船はすでに港を離れました。当分は荒波を乗り越えなければならないでしょうが、その過程で教員の資質が磨かれ、チームワークが完成されていくことを私は期待しています。

この数年、多くの教職員の皆さんと協力しあいながら様々な活動を行った経験から、昭和大学歯学部には優れた能力と情熱をもった教員が少なからずいることを知って勇気づけられました。教育業績は十分に評価されているとはいえませんが、それだからこそ、それに取り組んでいる彼らの活動は価値が高いといえましょう。昭和大学歯学部の将来を担う主役はその人達です。将来は明るい、私はそう思います。

最終講義を終えて

有床義歯学教室 芝 燁彦



平成16年1月23日(金)17時から18時30分までの90分間を使い、昭和大学歯学部臨床講堂において、私が昭和大学の有床義歯学講座で23年間行ってきた研究の中から2つのテーマ コーヌステレスコープデンチャーの基礎的・臨床的研究 と 機能水に関する研究 を取り挙げて最終講義を行った。

コーヌステレスコープデンチャーは、1970年ごろKorber,K.Hによって始められたが、私が教授に就任した当時日本ではほとんど行われていなかった。近い将来普及することが頭にひらめき、私は直ちにこの研究に取り組み、また実際の臨床に応用し、その優れた装着感と機能性を有するコーヌステレスコ-プデンチャーを広く普及させるため数多くの講習会を催し、本も書き、普及に努めた。その成果が実り、今日、日本では広く臨床に応用されている。最終講義ではコーヌステレスコープデンチャーを製作後19年間、残存歯の喪失、顎堤の吸収も生じず快適な日常生活を送っている症例を提示しながらその製作法の注意点・特徴を述べ、特に二次スプリント効果について講義をした。また外冠前装にポーセレンの使用は禁忌とされていたが審美性を満足させるためには外冠前装にポーセレンを用いたほうが良いということを実証するための基礎的研究、さらに新しい金属の開発などの研究について付け加えた。また多くの研究の集積の結果を踏まえて、現在私が開発したコーヌステレスコープデンチャーの斬新で合理的な設計法も披露した。

次に口腔内のケアが補綴物の予後にとって最も重要であり、その洗浄には機能水が最も適しているとする一連の研究に話題を移した。

「細菌を瞬時に殺すことのできる魔法の水があるんですよ。」のちょっとした雑談から始まり、研究を依頼されたことから研究が始まった。研究当初はその効果については半信半疑であったが、細菌の殺菌効果実験を行ったところ本当に瞬時に細菌が100%殺菌されてしまった。そこでこの水は消毒薬に代わる新しい消毒薬になりうると確信をもち、有床義歯学講座の研究テーマの一つとして本格的に研究に取り込むことを決心した。1990年10月大阪で開催された第84回日本補綴歯科学会学術大会で“OXILIZERによる電解水の歯科領域への応用、第1報 電解水の使用条件”と題しての発表が日本での、いや世界での口腔領域の学会における電解機能水の初めての登場であった。

“ 当時は歯科補綴学と電解機能水との間にどのような学問的なつながりがあるのか ” など冷やかな反応しか得られなかったが、電解機能水の生体安全性についての研究を行い、生体為害性は極めて少ないことを立証し、殺菌のメカニズムについても解明していった。その成果が実り強電解水歯科領域研究会が1994年6月16日発足した。毎年学術大会を開催していたが、賛同者が年毎に増えたことから、2000年3月25・26日には日本口腔機能水学会を設立して第1回日本口腔機能水学会学術大会を開催し、同時に日本口腔機能水学会誌も発刊した。その間機能水に関する科学的解明と有効な臨床応用法に関する論文を発表してきた。その論文を中心に機能水の有効で正しい使用法についてのマニュアルを製作中である。

最終講義では2つのテーマに絞って話をしたが、その他多くの研究を行い、多くの成果を挙げてきたと自負している。これらの研究には有床義歯学講座に在籍した先生方の力が絶大であった。本当に大変良き研究仲間にも恵まれたことは望外の喜びであった。

最終講義には多くの先生、学生、衛生士、技工士の方々などに出席して頂き、たくさんの花束を頂いたことは本当に嬉しいことであった。最後に、有床義歯学講座を支えてくれた先生方や昭和大学歯学部の関係者に深く感謝する。

やっと辿りついて

歯周病学教室 長谷川紘司



平成16年3月をもって、長らくお世話になった昭和大学を定年退職する。この日が来ることについては、前もって十分認識し心の整理に努めてきたつもりではあったが、二年、一年、半年と残された日が少なくなるにつれ、寂しさが押し寄せてきたのが正直の感想である。

その寂しさの反面、「やっと辿りついた」という実感もある。自分が歩んできた道は、勿論平坦ではなかったし、順風満帆には程遠かった。多くの夢を持ったがゆえに、いかんともし難い現実に立ちだかれ、痛みも、苦悶も、絶望もあった。しかし、若い人たちが誇りを持って社会に貢献できる歯科界を作り上げるために真摯に努力をする多くの方々の理解と支援があって、感涙にむせぶ感動そして心の底から沸きあがる喜びもあった。歯科界が、底辺でよい方向へ変わりつつある曙光も感じられる。その道のりも見えてきた。

これから歯科界で活躍してほしい若者たちへのメッセージとして、最終講義で語りかけたかったことは多い。実態として、老兵は消え去るのみと承知はしているが、老兵にも後継者に託したい「想い」があり、若者にも先人の努力の積み上げである伝統とこれからの大きな潮流を伝える「語り部」が必要であろう。

講義の最後に自分の好きな言葉を引用した。「まっとうなこと」、「こころざし - ゆめ」、「やさしさ」である。

「まっとう」であることは単にマトモという意味そのものではなく、何とも一言では表現しにくい言葉である。「あいつはまっとうである」というだけで、成績、身なり、言葉の多寡、表向きの信条はどうであれ、裸の人間として心許せる、一目置くべき、汚辱が無い、芯の部分で尊敬に値する人間に対して使われていた、というのが自分の解釈である。

「こころざし - ゆめ」は、文字通り大志であり夢である。仕事の上でまた個人の生き様として、受動的ではなく、理想に向かって前向きに、いつも額に汗する生き方が、それぞれの社会や仕事の発展と、個人の幸せと感動をもたらすものと信じている。

「やさしさ」には説明が要らないであろう。自分の属する社会、接する他人、心の支えあいが必要な家庭や友人に対して、傲慢であったり、唯我独尊であったり、人を踏み台にしたりしては、成熟した魅力ある環境が育たない。

最終講義後、二名の若い歯科医と一名の学生からメールが届いた。「まっとうな」歯科医師を目指して努力したいという言葉で結ばれていた。このような若い方たちが、将来の歯科界と昭和大学を発展させるに違いないと、心強く思った。

長年にわたり、「こころざし」に向かって努力する場を与えてくれた昭和大学に心から感謝するとともに、有為の若者たちがこの昭和大学の場で、さらに大きな夢の実現をこころざして頂きたいと願っている。

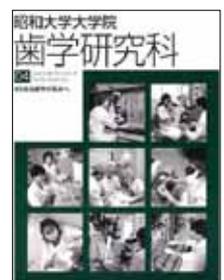
またどこかでお会いしましょう。

大学院歯学研究科入試情報 歯学研究科運営委員長 長谷川紘司

期（平成15年9月27日）で22名、期（平成16年2月14日）において3名の合格者があった。期で併催された大学院語学試験（乙）の合格者は以下の通り。

竹内俊一、小椋佳代子、増田睦雄、吉田和代、西馬伸幸、石橋弘子、小六英斗、桑澤実希、王 燕（受験番号順）

次回の期入試および語学試験は平成16年9月25日の予定。



臨床研修医募集

副院長 久光 久

平成15年12月24日に説明会を開催しました。説明会出席者数は学内から37名、他大学から31名の計68名でした。その後の希望診療科などに関するアンケート形式の予備調査の結果、研修希望者は、学内から28名、他大学から25名の計53名となりました。

第一希望の診療科名は、歯科矯正科15名、口腔外科10名、保存修復科7名、補綴科7名、小児歯科6名、高齢者歯科4名、歯内療法科2名、歯周病科2名でした。他大学では、神奈川歯科4名、明海大学4名、奥羽大学3名、日本大学3名、日本大学松戸3名、日本歯科2名、日本歯科新潟1名、鶴見大学1名、松本歯科1名でした。最終出願締切が2月23日、選考日が3月3日となっております。

4 大学歯学部交流会

2月23日(月)・24日(火)の両日、北海道医療大学、岩手医科大学、福岡歯科大学の交流会が開催されました。23日は、午後1時より各大学の先生方の講演が旗の台キャンパス1号館7階講堂にてシンポジウム形式で行われ、24日の午前中に歯科病院の施設見学が行われました。詳細については次号に掲載予定です。

歯学部入試情報

試験	募集人員	出願期間	試験日	合格発表
推薦	30名	H15.11.4 - 11.12	H15.11.16	H15.11.19
編入	若干名	H15.11.4 - 11.12	H15.11.16	H15.11.19
センター	3名	H16.1.5 - 1.22	H16.1.17, 18, H16.1.29	H16.2.5
選抜 期	55名	H16.1.5 - 1.22	H16.1.29	H16.1.31
選抜 期	8名	H16.2.16 - 3.2	H16.3.7	H16.3.8



詳細については、昭和大学ホームページをご覧ください。入試係(03-3784-8022)まで。

推薦入試では指定校推薦、一般推薦合わせて49名(男子24名、女子25名)の志願者があり、男子14名、女子16名が合格した。編入学試験では本年度から基礎学力テストが実施され、19名の受験に対して、5名(男子1名、女子4名)の合格者が発表された。選抜 期入試は、昭和56年度以降で最多の598名もの志願者があった(昨年度より50名増)。本年度の学科試験はマークシート方式で出題され、55名(男子32名、女子23名)が合格した。またセンター試験は、79名の志願者があり、6名(男子3名、女子3名)が合格した。

診療統計(平成15年11月～平成16年1月分)

枠内の数字は順に11月、12月、1月分

区分	患者数			1日平均			前月1日平均			前年同月1日平均		
入院患者延数	544	570	404	18.1	18.4	13.0	16.3	18.1	18.4	12.3	14.9	9.6
新入院患者数	46	40	49	1.5	1.3	1.6	1.7	1.5	1.3	1.7	1.8	1.1
退院患者数	47	53	37	1.6	1.7	1.2	1.5	1.6	1.7	1.7	2.0	0.9
外来患者延数	14266	15960	14886	713.3	760.0	708.9	683.5	713.3	760.0	689.3	744.4	700.0
新患延数	967	1089	1105	48.4	51.9	52.6	49.8	48.4	51.9	49.2	48.9	56.5
病床利用率(%)	60.4	61.3	43.4	診療実日数 入院 11月:30日, 12月:31日, 1月:31日								
平均在院日数(日)	11.7	12.3	9.4	外来 11月:20日, 12月:21日, 1月:21日								

受賞おめでとうございます

高場雅之先生(冠橋義歯学):平成15年度日本補綴歯科学会奨励論文賞。
『咬合力による咬合接触状態の変化と咀嚼機能』(11月)



報道された歯学部

道脇幸博先生(第一口外):日刊歯科通信「4次元MRI撮像法による嚥下・構音メカニズムの解明」(1/23)
西村伸二郎先生(歯科麻酔科客員教授):日本工業新聞社「歯科医院向け無料経営相談サービス」(2/16)

行事予定

- 平成16年 3月 3日(水):卒業式
- 平成16年 3月 7日(木):選抜 期入試
- 平成16年 3月17,18日(水,木):歯科医師国家試験
- 平成16年 3月23日(火):卒業生謝恩会(ハ^o-外伊ツ東京)
- 平成16年 3月24日(水):大学院終了式
- 平成16年 4月 9日(金):入学式



次号は3月発行予定です。